平井　晩村

小説家・ひらい　ばんそん　Banson Hirai
1884～1919

【明治17年～大正8年】

来草年
大正7年/1918

草津節の原形を作詩。人間味あふれた作風で時代を魅了。

「草津よいとこ／一度はお出で」の草津節の作詞者としても有名な本県出身の小説家・詩人。『新声』『文庫』などに短歌・詩を投稿して認められる。民謡集『野薔薇』の出版に際して、夏目漱石、相馬御風、横瀬夜雨らの有名人が序文を寄せている。妻の死後、3児とともに前橋に戻り『少年倶楽部』『日本少年』などの少年小説を、『面白倶楽部』に歴史小説を発表し、執筆に追われた。また『上野毎日新聞』の主幹となり、旧制前橋中学の校歌も作詩。詩集に『野葡萄』『茶摘唄』『麦笛』。いずれも自然の抒情的描写の中に人生的な哀感をにじませ、民謡風な世界を形成している。

「草津よいとこ　一度はお出で～」。有名な草津節の原形を作詩したのが晩村です。紀行文「湯けむり」の中で「湯もみの拍子に合うやふな唄を…」と思い立ち、扇の白地に書き付けたのが「草津よいとこ里への土産　袖に湯花の香が残る」「草津よいとこ　白根の雪に　暑さ知らずの風が吹く」という二つの歌。大滝乃湯の庭に、その歌碑が建てられています。また、遺族のご好意により、晩村の遺品一式が町に寄贈され、温泉資料館の晩村コーナーに展示されています。

水野　仙子

小説家・みずの　せんこ　Senko Mizuno
1888～1919

【明治21年～大正8年】

来草年
大正7年/1918

早すぎる死。花袋、有島らに才能を惜しまれた女流作家。

明治末期から大正初期の女性作家。福島県出身で、長兄は歌人の服部躬治。須賀川裁縫女学校に在学中から『文学世界』などへ投稿を続け、田山花袋に認められて上京する。明治42（1909）年、長姉の死産の様子を描いた『徒労』で文壇デビューを果たす。同門の川浪道三との恋愛、結婚生活を経て、男女間の相剋、心の行き違いや揺れを記した『淋しい二人』『神楽坂の半襟』を発表。その後、結核を患った夫から感染。3年間の闘病生活で死を見つめた作品を残す。死後、夫を中心に田山花袋、有島武郎らにより、大正9（1920）年、『水野仙子集』が刊行。洋画家の岸田劉生が装丁を手掛けた。

仙子は肋膜炎に侵されたとき、草津で医師として活躍していた姉・服部けさ子を頼り、この地を訪れました。けさ子は「聖バルナバ医院」や「鈴蘭病院」などに勤務。姉の懸命なる治療にもかかわらず、薬石効なく、仙子は32歳の若さで病没。田山花袋が大きな期待を寄せていた仙子の死は、あまりにも早く、あまりにも突然でした。

大町　桂月

随筆家・おおまち　けいげつ　Keigetsu Omachi
1869～1925

【明治2年～大正14年】

来草年
明治41年/1908

言葉を道具に、幅広い分野で活躍した、明治のエッセイスト。

随筆家、詩人、評論家、国学者、記者とさまざまなジャンルで活躍。高知県生まれ。12歳の時に叔父を頼って上京するが、まもなく両親を亡くし兄の元へ。第一高等中学時代に文学に親しみ、帝大に入学。武島羽衣らの創刊した『帝国文学』に、塩井雨江とともに美文、韻文を発表した。その後、3者によって刊行された詩文集『花紅葉』の「古典を模倣した文体や主題」が評価を得、大学派・赤門派と呼ばれて当時の詩壇に存在を示した。後に、島根の中学校教師を経て博文館に入社。『太陽』『中学世界』などに毎号、評論や紀行文を掲載した。明治31（1898）年に刊行された『黄菊白菊』には、擬古典派の美文を収めている。

桂月が草津を訪れたのは、明治41（1908）年の晩秋。草津のことは『関東の山水』の中で、ユーモアを込めて「アラおかし、風呂に入るに号令かけて　揃って三分、改正の二分、残って一分　チックリ辛抱、辛抱のしどころ　でとび上る」という歌にして表現しています。

河東碧梧桐

俳人・かわひがし　へきごとう　Hekigotou Kawahigashi
1873～1937

【明治6年～昭和12年】

来草年
大正10年/1921

子規没後の、句界の巨星。新傾向俳句を唱え、自由な表現を追求。

中学時代から正岡子規に師事した俳人。松山市生まれ。絵画的作風、印象明瞭の個性を持ち味に「俳句革新運動」に加わる。子規没後、『日本俳壇』を主宰。新傾向俳句を唱え、単なる自然諷詠でなく、個人の官能感覚を通した描写を志向。定型にとらわれず、自然主義に接近した、いわゆる「無中心論」を提唱し、子規門の双璧として知られた高浜虚子と対立。旧習打破、真実探求、個性拡充の時代の風潮は新傾向運動に強い刺激を与え、全国を風靡した。大正時代、門下が離反分裂する中で、さらに自由律に進む。晩年は、ルビ俳句を試みるなどその生涯は詩人的純粋さで貫かれた。句集『碧梧桐句集』ほか、紀行文に『三千里』など。

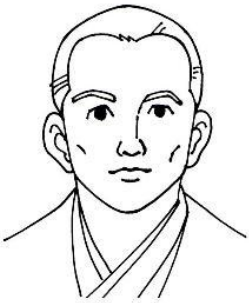
碧梧桐は、来草の折り、旅館の看板の文字を書き、現在も同館に設置されています。俳人として名高い碧梧桐ですが、晩年は「書」を生活の資とし、中国六朝体の書風を、洋画家であり書家でもある中村不折らとともに研究に精を出しました。草津行きは、その不折のすすめではないか、といわれています。

長塚　節

歌人・小説家・ながつか　たかし　Takashi Nagatsuka
1879～1915

【明治12年～大正4年】

来草年
明治30年/1897



茨城出身。農民の悲哀を描いた『土』は、代表作に。

正岡子規に入門し、写生主義を継承した歌人、小説家。号に桜芽・夏木・青果・黄海楼主人。茨城県生まれ。子規の『歌よみに与ふる書』などを読んで異常な感銘を受けて入門。子規の死後『馬酔木』の同人となり、廃刊後は『アカネ』を経て『アララギ』に参加する。写生の徹底を目指し、自然観賞や冴えを精細に説き、アララギ興隆の基礎を築くが、新風を求める島木赤彦、斉藤茂吉らと対立。文化活動のほか、子規の勧めもあって故郷で炭焼き、肥料改良などの農事研究にも従事する。短歌の代表作には、死の間際まで続けた連作『鍼の如く』、小説には貧しい農民の悲哀を精細執拗に描いた『土』がある。

長塚節が草津を訪れたのは、明治30（1897）年と41（1908）年の2度。最初の来草は、持病の脳神経衰弱の治療のためでした。その時「浅間嶺は雲の立ちしかば常の日は　天に見しかど低山に見ゆ」など7首の短歌を作っています。二度目の草津に訪れたその帰り道、榛名を越え、たまたま濃霧にあった情景を歌った「濃霧の歌」15首も非常に有名です。

若山　牧水

歌人・わかやま　ぼくすい　Bokusui Wakayama
1885～1928

【明治18年～昭和3年】

来草年
大正9年/1920

旅に生き、酒とともに暮らした、歌壇の寵児。

旅の歌人、酒の歌人として知られた庶民的歌人。宮城県出身。中学在学中から作歌活動を開始、早大入学直後に定型短歌への懐疑を表明した尾上柴舟門下となり、前田夕暮、正富汪洋らと『車前草社』を結成。主に『新声』に作品を発表した。『別離』で一躍歌壇の寵児となり『牧水、夕暮時代』を築いた。雑誌『創作』も創刊・主宰。作品は青春の苦悩を悲愁と憧憬をこめて感情的に詠い、晩年には旅を中心に自然と酒を詠じて、人生の疲労と倦怠を反映。優れた紀行文や随筆も発表している。主な作品に『海の声』『独り歌へる』『路上』『死か芸術か』など。石川啄木とも親交が深かった。

草津を訪れた牧水は、吾妻川の渓谷や周囲の山並みに心酔し、『上州草津』などの紀行文、多くの詩歌に自然の美しさを表現しました。紀行文の多くは時間湯の描写に割かれており、「湯もみの板の音がいよいよ激しく、その唄もつぎからつぎへとつづく。（中略）料理屋の三味線のさわぎがきこえ、あんまの笛もまじる。」と、夕暮れ時の草津の情景が描かれています。

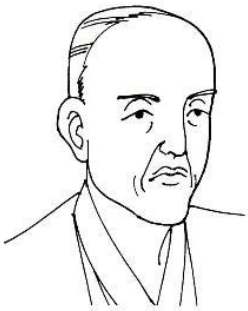
小野　湖山

漢詩人・おの　こざん　Kozan Ono
1814～1910

【文化11年～明治43年】

来草年
明治10年/1877

激動の時代に作風を高めた漢詩人。政府の能吏、という横顔も。



幕末維新期の漢詩人。近江国（滋賀県）浅井郡高畑村の医師・横山玄篤の長男。本来は横山氏だが、小野篁の裔であるとして、後に小野氏を称するようになった。郷里の大岡松堂に徒学したのち、江戸で尾藤水竹、藤森弘庵に経史を学ぶ傍ら、梁川星巌の玉池吟社に学んで頭角を現す。維新後、明治政府の総裁局権弁事、記録局主任に任じられたが、ほどなく辞任。その後は、大沼沈山、鱸松塘とともに東京詩壇の重鎮として活躍した。明治16（1883）年には、維新の功績が認められて天皇から硯と京絹を賜り、感激してその書斎を「賜硯楼」と名付けたという。詩集に『湖山楼詩屏風』『湖山楼詩鈔』など。

明治時代、漢詩壇に名を馳せた小野湖山が草津温泉を訪れたのは、藤森弘庵が上州の地を経歴したころと推測されます。「右海内幾處有温泉　第一屈指是草津…」と始まる『游草津温泉歌』のほか、『草津雑詩』『草津客中作』など、湖山は、草津の風物を詠んだ作品を多数残しています。

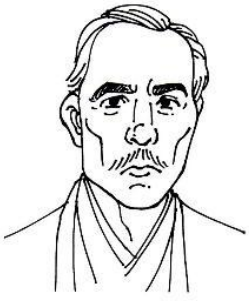
横山　大観

日本画家・よこやまたいかん　Taikan Yokoyama
1868～1958

【明治元年～昭和33年】

来草年
大正4年/1915

日本美術の優秀性を説き、日本画の近代化を推進。



明治22（1889）年、東京美術学校（東京芸術大学の前身）に一回生として入学。狩野派・橋本雅邦に師事した。卒業後、古典の模写に努め、この頃から大観の雅号を用いた。明治29（1896）年、母校の助教授に着任。翌年発表した「無我」は出世作に。しかし学内騒動にともない辞職。日本美術院創立に参加する。この時代、画友・菱田春草と西洋画手法の採用、無線描法（朦朧体）を試み「日本画の近代化」を積極的に推進した。大正3（1914）年、日本美術院を再興。院の中心となり、芸術の自由と独立を唱える。総決算ともいえる水墨画『生々流転』は、この頃描かれた大作。昭和12（1937）年、第一回文化勲章を受賞。画壇の第一人者として、生涯、活躍を続けた。

大観は、同人の方２人とともに、大正４（1915）年、草津温泉を訪れています。当時、日本美術院を再興させ、名実ともに画壇の中心的存在だった大観は、町の名士にも記念撮影をせがまれたようで、その時の写真は、六合村小雨にある「冬住みの里資料館」に大切に保存されています。

川端　龍子

日本画家・かわばた　りゅうし　Ryushi Kawabata
1885～1966

【明治18年～昭和41年】

来草年
大正5年/1916

大胆な色彩、奔放な構成で知られた、日本画壇の巨匠。

剛健な大作を次々と発表した日本画壇の巨匠。和歌山県生まれ。画家を志して白馬会洋画研究所、太平洋画研究所で学ぶ一方、漫画や新聞挿絵なども手がける。ボストン美術館で東洋画に感銘して帰国した後、日本画に転向。平福百穂らの「无声会」に参加。初の日本画となった『観光客』が東京大正博覧会に入選。2年後、再興日本美術院で初入選を果たして同人となるが、剛健な会場芸術を唱えて脱会。「青龍社」を結成・主宰して、豪放な作品を生み出した。昭和12（1937）年には帝国芸術院会員に推されたが辞退。昭和34（1959）年に文化勲章受章。俳句『ホトトギス』同人でもあった。

草津温泉は、龍子の出世作『霊泉由来』の舞台にもなりました。野獣と温泉にからむ山の伝説を描こうとした龍子は、湯畑に立つ灯籠を見た瞬間に着想。その喜びを龍子は「その第一印象は壮観！　たちまち私の頭は働き出した。（中略）私の構想は草津の町の瞬間の印象でまとまった。」と記しています。この作品は第三回院展に入選、樗牛賞を受賞しました。

犬養　木堂(毅)

総理大臣・いぬかい　ぼくどう(つよし)　Bokudou(Tsuyoshi) Inukai
1855～1932

【安政2年～昭和7年】

来草年
大正6年/1917

五・一五事件で殺害された護憲派の首相。「政界の策士」の異名も。

普通選挙運動を推進した、政党政治家。木堂は雅号。岡山県生まれ。大隈重信に従って立憲改進党結成に参加。一貫して政党政治の確立に貢献し、憲政擁護運動を指導した。大隈内閣の文部大臣、山本内閣の通信兼文部大臣、加藤内閣の遞信大臣などを歴任。一時期、政界を引退するが、後継者たちに推されて衆議院議員に再選。田中義一政友会総裁の後継に。昭和6（1931）年、内閣を組織して満州事変後の難局にあたるが、翌年、海軍青年将校が指導した五・一五事件により殺害。その時、テロを実行した将校に「話せばわかる」と放った言葉はあまりにも有名。書にも優れ、中国の政治家との親交も深く、情に厚い政治家としても知られている。

護憲派の首相・犬養毅は、「木堂会」開催のため草津を訪れました。当時、毅は政党政治を標榜し、国民党党首として、党の主張を遊説したと伝えられています。

アーネスト・サトウ

外交官・Ernest Mason Satow
1843～1929

【天保42年～昭和4年】

来草年
明治10年/1877

日英両国を結び、維新史に名を残した、らつ腕外交官。

幕末から明治期にかけて、通事として活躍したイギリスの外交官。ロンドン生まれ。東洋に憧れを抱き、外務省の通訳生試験に合格。慶応元（1865）年、横浜領事館付き日本語通訳官に。翌年『ジャパン・タイムズ』に「英国策論」を発表し、自ら日本語に翻訳。「天皇を元首とする諸大名の連合体が支配勢力になるべき」という倒幕を示唆した内容で広く世に知れた。日本語書記官を経て、ウルグアイ公使、モロッコ公使など歴任した後、明治28（1895）年には日本駐在公使に任命。死去にともない、「偉大な極東外交官」と讃えられた。『英和口語辞典』『一外交官の見た明治維新』など数多くの日本研究書を執筆。

明治15（1882）年、アーネストが来草した時、草津は厳寒の冬を迎えていて、旅館の多くは筵で囲われていました。その様子を彼は「輸送されるのを待つ大きな商品」のよう、と比喩。寒さのためか、温泉に2度入り、「湯は大変熱く、（中略）皮膚のあらゆる孔を刺激する」という感想を残しています。

尾崎　咢堂（行雄）

政治家（法務大臣）・おざき　がくどう（ゆきお）Gakudou（Yukio）Ozaki
1858～1954

【安政5年～昭和29年】

来草年
明治5年/1872

憲政擁護運動を指揮。“憲政の神様”と称された孤高の政治家。

神奈川県に生まれ、慶應義塾を経て新聞記者に。明治14（1881）年、大隈重信の招きで統計院権少書記官に任官後、ジャーナリストとしても活躍。明治23（1890）年、第1回総選挙から連続25回の当選を果たす。その後、外務省勅任参事官や憲政党総務を経て、明治31（1898）年、隈板内閣で文相に。明治33（1900）年、伊藤博文の立憲政友会の最高幹部となるが、脱党。後、復党し、大正元（1912）年、憲政擁護運動を国民党の犬養毅と指揮。昭和3（1928）年、第2次大隈内閣に法相として入閣した。昭和14（1939）年以降は、党に属さず、軍部の台頭、全体主義傾向への批判を展開。著作に『尾崎咢堂全集』。

明治5（1872）年、父の転任にあたり休暇を取り、一家で草津を訪れました。来草前、咢堂の右腿には直径一寸五分くらいの出来ものがあり、「温泉が効いたのかも知れませんが、皮膚のぼつぼつも草津でなくなってしまひました」と後に記しています。しかし、皮膚の色までは治らなかったようです。

嘉納　治五郎

柔道創始者・かのう　じごろう　Jigorou Kanou
1860～1938

【万延元年～昭和13年】

来草年
大正8年/1919

近代柔道を考案。日本スポーツ界の発展に尽くす。

近代柔道の発展に努めた、講道館柔道の創始者。明治10（1877）年、虚弱体質のため天神真楊流道場に入門、柔術を習う。明治14（1881）年、東大文科卒後、翌年学習院講師に。同学教頭、高等師範学校校長などを歴任した。早くから「講道館」の額を掲げ、柔術を指導。後、日本伝講道館柔道と称して「柔道」の成立を宣言。優れた理想と技術によって国内外に「柔道」を広めた。明治42（1909）年、日本初の国際オリンピック委員会委員に就任。第5回ストックホルム五輪には、選手2名を率い初参加。東京オリンピックの誘致を成功させるなど、日本スポーツ界に多大な功績を残した。彼の名を冠した「嘉納治五郎杯」も開催されている。

治五郎は、大正8（1919）年8月21日、貴族院議員を務めていた時、夫人とともに来草しています。『草津町史』には、滞在は5泊だったという記録が残されています。

近衛　文麿

総理大臣・このえ　ふみまろ　Fumimaro Konoe
1891～1945

【明治24年～昭和20年】

来草年
昭和11年/1936

大戦前の争乱期、3度首相の座に着いた、名家出の政治家。

昭和初期に3度組閣した首相。東京都出身。藤原家の直系で摂政関白を出す公卿最高の家柄・近衛家の長男。指揮者・作曲家である近衛秀麿の実兄。西園寺公望の随員としてベルサイユ講和会議に出席したのち貴族院議長となる。第1次組閣時は日中戦争の拡大・長期化を防ぎ得ず、近衛声明で和平交渉を打ち切る。汪兆銘の重慶脱出を機に退陣。第2次組閣時は、大政翼賛会を創立、日独伊三国同盟を締結、日ソ中立条約を調印。対ソ宣戦を主張する松岡洋右外相と対立して総辞職。第3次組閣時、衝突回避の日米交渉に失敗して退陣。太平洋戦争敗戦後、東久邇内閣の国務相として憲法改正案の起草にあたったが、戦犯容疑者の指定を受け、拘引の直前に服毒自殺。

近衛文麿元首相の来草は「昭和11年西の河原　太田亥十二氏（財界関係者）の別荘に来草」と草津町史に記されています。

田中　角栄

総理大臣・たなか　かくえい　Kakuei Tanaka
1918～1993

【大正7年～平成5年】

来草年
昭和42年/1967

「日本列島改造論」を提唱。カリスマ的な支持を集めた、剛腕の首相。

新潟県出身。「コンピューター付きブルドーザー」「今太閤」などの渾名数多い政治家。貧困の中で少年時代を過ごしたが、持ち前の活動力と明晰な頭脳を活かし、若干29歳で代議士に。以来、16回連続当選を果たす。昭和32（1957）年には、39歳の若さで初入閣。池田、佐藤両内閣下では、蔵相に就任。驚くほどの才腕を発揮し、党内での地位を固めた。昭和45（1970）年、田中内閣が発足。就任早々、北京を劇的訪問。日中国交を回復させた。「決断と実行」を信念に、迅速かつ大胆な政治手腕は国民的支持を得、「庶民派宰相」と称された。

田中元首相が来草したのは、郷土出身の小渕恵三衆議院議員（のちに第84代総理大臣に就任）が二期目の当選を目指していた昭和42（1967）年のこと。トレードマークの帽子をかぶり、会場を埋めた聴衆を前に大熱弁。小渕候補は、選挙を見事勝ち抜きました。

佐藤　栄作

総理大臣・さとう　えいさく　Eisaku Satou
1901～1975

【明治34年～昭和50年】

来草年
昭和22年/1947

沖縄返還を実現。日本でただ一人、ノーベル平和賞を受賞。

池田内閣を後継し、沖縄返還を成功させた総理大臣。山口県出身。長兄・市郎は海軍中尉、次兄・岸信介は首相。大正13（1924）年東大卒後、鉄道省に入り、鉄道局長や運輸事務次官に就任。昭和23（1948）年に民主自由党入党。第2次吉田内閣で官房長官に抜擢され、吉田内閣の各省大臣を歴任する。佐藤栄作の最大の事業は「沖縄返還」であった。首相在任中、ジョンソン、ニクソン両米大統領との交渉に勤しみ、昭和47（1972）年5月15日、沖縄返還が実現。また、昭和49（1974）年12月、首相在任中の非核3原則などの政策が評価され、ノーベル平和賞を受賞。

戦後復興の槌音響く昭和22（1947）年、後の総理大臣・佐藤栄作が草津を訪れています。小渕光平氏の案内で、群馬鉄山草津事務所を視察しました。また、佐藤元首相は同年2月、運輸事務次官に就任しており、終戦間近に開通した旧国鉄長野原線（現・JR吾妻線）を視察したことも推測できます。

福田　赳夫

総理大臣・ふくだ　たけお　Takeo Hukuda
1905～1995

【明治38年～平成7年】

来草年
昭和54年/1979

上州が生んだ、初の総理大臣。「さあ働こう内閣」を合言葉に、諸案件を処理。

群馬県群馬町生まれ。東京大学卒業後、大蔵省へ。主計局長を最後に退職。昭和27（1952）年衆議院議員に初当選。保守合同後の自民党では、「党風刷新連盟」を組織。池田内閣の経済路線を批判し、党改革を進めた。佐藤内閣後のプリンスと目されるが、昭和47（1972）年の総裁選で田中角栄に惜敗。田中内閣下では蔵相に就任。石油危機後の「狂乱物価」経済の修正に全力を尽くす。昭和51（1976）年、首相に就任。自らを「内閣掃除大臣」と称し、歴代未解決案件を処理。日中平和友好条約の締結など、外交手腕も高く評価された。退陣後は、国際平和に貢献。昭和56（1981）年、国連平和賞を受賞した。

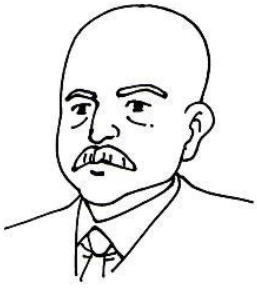
福田元首相の初来草は、政界入りを目指していた昭和27（1952）年の夏のこと。講演会を開催し、自身の決意を熱く語りました。その後も、国立療養所の慰問を始め、忙しい合間を縫って草津を訪れています。特に、昭和63（1988）年、政治生活35周年祝賀会が開かれた折りには、家族をともなって来草。温泉でゆったりとしたひとときを過ごしました。

入沢　達吉

医師（内科学者）・いりさわ　たつきち　Tatsukichi Irisawa
1865～1938

【慶応元年～昭和13年】

来草年
昭和10年/1935



ベルツを敬愛し、日本近代医学・草創期を支えた、内科学の権威。

新潟県生まれの内科学者。父は藩医。東大卒業後、ベルツ博士の助手となり内科学を習得。ドイツへ留学後、宮内省侍医局勤務、足尾銅山鉱毒事件には委員として参画した。明治28（1895）年、東大助教授となり、後、ベルツ博士退職を受け教授へ。入沢内科を創始・主宰し、日本内科学の確立に貢献した。脚気に関連する広範な研究や十二指腸虫の感染経路の追究、さらにレントゲン診断学応用、血色素測定法など内科学全般の研究に励む。東大退職後は侍医頭を務めたほか、同仁会（中国各地に病院を設立した団体）副会長として訪中、中国の医療向上に努めた。日独協会理事長にも就任、国際交流に尽くす。

ベルツの記念碑は、愛弟子ともいえる入沢博士の多大な尽力があって建立されました。昭和10（1935）年、朝日新聞「ベルツ先生と草津」と題した寄稿記事の中で、入沢博士は「そいつ（＝草津の人情風俗）が好きで好きでわざわざ東京から歩いたりガタ馬車に揺られたりして通われた」ベルツの草津への心酔ぶりを、親しみを込めて語っています。

石橋　長英

医師(小児科医)・いしばし　ちょうえい　Chouei Ishibashi
1893～1980

【明治26年～昭和55年】

来草年
昭和55年/1980

ドイツ医学に傾倒。日独両国、医学界の発展に多くの功績を。

日本国際医学協会会長や獨協大学名誉学長を務めた医学博士で、専門は小児科学。千葉県九十九里出身。大正7（1918）年、東京帝大医科大卒後、日本医学専門学校教授、同附属病院小児科部長を経て、昭和2（1927）年に小児科病院を開業する。昭和6（1931）年東京農大教授、昭和23（1948）年には獨協医科大学長に就任、後、名誉学長に。国際医学協会や日独医学協会、日本医学協会を主宰。ドイツ医学に傾倒し、ドイツ医学界との交流に熱心に取り組む。その功績が認められて西ドイツ大功労十字星章など数々の功労賞を授与されている。著書は「エルウィン・フォン・ベルツ」、「母子栄養」、「乳児の下痢」など多数。

草津町は、昭和37（1962）年にベルツ博士の生誕地・ドイツ国ビーティヒハイム・ビッシンゲン市と姉妹都市を締結。石橋博士は、この成立と両都市間の交流に力を注ぎました。草津町は、昭和55（1980）年に町制施行80周年・ベルツ博士来草100周年記念事業を挙行、石橋博士の労を讃えて「草津ベルツ牌」を贈りました。

阿部　真之助

評論家・あべ　しんのすけ　Shinnosuke Abe
1884～1964

【明治17年～昭和39年】

来草年
昭和8年/1933

人物、政治を題材に、論陣を張ったジャーナリスト。元NHK会長。

ジャーナリスト、評論家。明治41（1908）年に東大社会学科卒後、満州日々新聞社に。明治44（1911）年に退社し、東京日々新聞社へ。昭和元（1926）年、当時無名の吉川英治作品「鳴門秘帖」の連載に踏み切り、好評を得る。待命休職となった昭和5（1930）年、「中央公論」や「サンデー毎日」に人物評論などを掲載。各誌に寄稿し評論家としての地位を上げた。戦後も政治家をメインに人物評論を執筆する一方、政府委員、横綱審議委員会などを歴任。昭和35（1960）年にNHK会長に就任、NHK開放や経営近代化・合理化に努力した。埼玉県熊谷市生まれ。

終戦直後の昭和20（1945）年秋、前橋市に夫人と疎開中だった真之助は、草津文化協会から講演会を依頼されました。接待を担当していた事務員が差し出した揮毫帖に「桑の枝撓はめて吹くや赤城嵐　日溜まりや桑の枯葉も吹きためし」と一句詠んだといいます。また、草津文化協会の機関誌（創刊号）には「草津文協の使命」を寄稿しています。